

1997年に召された、ヴィクトール・フランクルという、オーストリアの心理学者がいます。フランクルは、第二次世界大戦中、ユダヤ人であるために、ナチスによって強制収容所に送られ、九死に一生を得る様な苦しい経験をしました。彼は、この時の体験を基にして、ロゴセラピーという心理療法を確立しました。ロゴセラピーとは、人が自らの「生の意味」を見出すことによって、心の病を癒そうとする心理療法です。

フランクルは、人間の主要な関心事は、快樂を探求することでも、苦痛を軽減することでもない。それは、「人生の意味を見出すこと」であると言っています。

人生の意味を見出している人は、どんな苦しみにも耐えることができる、というのです。逆に、人生の意味を失ってしまった時に、人は生きる力を無くしてしまいます。

そのフランクルがこういうことを書いています。

「ある時、年老いた一人の医師がフランクルのもとを訪れました。彼は、二年前に最愛の妻を亡くしました。本当に仲の良い夫婦であったので、その嘆き、悲しみは、計り知ることのできないほど深いものでした。周囲の人がどんなに慰めても、彼はその痛手から立ち直ることができませんでした。そこで人々は、彼をフランクルのもとに連れてきました。フランクルは、その老医師の歎きを聞き、打ちひしがれたその姿を見てこう言いました。『あなたは、奥様の死を、そんなに悲しんでおられる。では、いっそのこと、あなたが先に死んでいたら良かったですね。』それを聞いて、その老医師はこう答えました。

『いえ、そんなことはできません。今、私が味わっているこの苦しみを、最愛の妻に味わわせることなど、決してできません。』それを聞いてフランクルは答えました。『もうお分かりでしょう。あなたの奥様はその苦しみを免れることができたのです。

そして、その苦しみから奥様を救ったのは、ほかならないあなたなのです。ですから、今、あなたが奥様を失った悲しみに打ちひしがれていることには意味があるのです。奥様が受けたかもしれない、いや、きつ

と受けたに違いないその苦しみを、あなたが奥様に代わって、今、苦しんでいるのですよ。』

その時、老医師はフランクルの手を握り締めて、言いました。

『ああ。本当にそうでした。もし、私が先に死んでいたら、妻が味わわなくてはいけない苦しみを、今、私が代わって苦しんでいるのですね。』

こう言って、その老医師は、感謝して出て行きました。」この老医師にとって、苦しみがなくなったわけではありません。しかし、苦しみの意味が分かったことによって、苦しみに向き合うことが、できるようになったのです。清水ヶ丘教会の愛する兄弟の中にも、最愛のご主人、あるいは奥様を天に送られて、深い悲しみの中におられる方々がいらっしゃいます。その悲しみの深さを思うと、お慰めする言葉も見つかりません。しかし、私たちは、「愛の主は、無意味に人を苦しめることはなさらないお方である」と信じています。哀歌3章33節に、「人の子らを苦しめ悩ますことがあってもそれが御心なのではない」とあります。

そうなのです。主は、決して、無意味に人を苦しめることはされないお方なのです。今は分からなくても、きっと苦しみの意味を分からせてくださいます。もし、分からないままで、地上の生涯を終えることになったら、天国で主イエスに質問しましょう。きっと、主イエスは答えてくださいます。私たちの神様は、私たちのために、最愛の独り子を十字架にまでかけてくださったお方です。そこまで、私たちを愛し抜いてくださるお方です。

その神様がなされることには、必ず意味があることを信じて、共に歩んで行きましょう。主は「善なる方、すべてを善とする方」(詩編一一九編六八節)なのです。最後に、ナチに抵抗したために処刑されたボンフェファアが、1943年のクリスマスに親しい友人に宛てて獄中で書いた手紙からの言葉を、紹介させていただきます。

『思い出が美しく、充実していればいる程、別離は一層辛い。だが感謝は、思い出の苦しみを静かな喜びに変えてくれる。人は過ぎ去った美しいものを、一つの棘のようにではなく、高価な贈り物のように自分の内に携えていくものだ。』

愛する方を天に送られた兄弟に、主の慰めと励ましが、豊かにありますように、お祈りさせていただきます。

クラーク博士は札幌農学校に着任すると全校に聖書を贈呈し、讚美歌を歌い祈ることから授業を始めます。日曜日にはバイブルクラスを開きキリスト教の真髓を学生に伝えたのです。更に校則も廃止し、「ゼントルマンたれ」と一条を掲げるのみでした。

クラーク博士と言えば「少年よ（キリストにあって）大志を抱け」と言う惜別の言葉が有名ですが、札幌農学校の開校式の演説の中に既に「大志」と言う言葉を使っています。「多年、暗雲のような東洋諸国民を覆っていた階級制度や因習という束縛から、これら諸国民を自由にしたこの驚くべき解放（明治維新）は、これより本校で教育を受けようとする学生諸君の胸中に、おのずから高邁な大志を呼び起こすであろうと信じている。」この言葉から始まるクラーク博士は在任僅か八ヶ月ですが、第一期生に衝撃的な感化影響を与えます。この一期生に佐藤昌介・大島正健等十五名、二期生に内村鑑三・新渡戸稲造・宮部金吾・広井勇等十八名を数えます。この中から近代日本の黎明期のキリスト教界、学界、政界を指導する有為な人物が輩出されているのです。

当時札幌は教会もなく牧師もいない状況で博士は自分が去ってしまえば、学生たちの信仰心は揺らぎ薄らぐに違いない。そこで「イエスの信徒」として学生を纏めておく必要を痛感し、学生に「イエスを信ずる者の誓約」を求めたのです。その内容はプロテスタント教会の信仰告白文と見間違ふほどの聖書の真理の核心を突いているものです。この英文の歴史的な誓約書は現在も札幌独立基督教会に保管されており、第一期生全員が英語でサインしクラーク博士が去った後に入学した第二期生の太田（新渡戸）稲造・内村鑑三等七名の名前も英語のサインで残っています。

《イエスを信ずる者の契約》一部抜粋

「下に署名する札幌農学校の学生は、キリストの命に従いてキリストを信ずることを告白し、且つキリスト信徒の義務を忠実に尽くして祝すべき主即ち十字架の死を以て我らの罪をあがない給いし者に、我等の愛と感謝の情を表し、且つキリストの王国が拡がり栄光が現われ、そのあがない給える人々の救われんことを切望する。故に我等は今後キリストの忠実なる弟子と

なりて、その教えを欠くことなく守らんことを厳かに神に誓い、且つ互いに誓う。」

このように前置きをして、その後に具体的に十戒・キリスト者として最も重要な掟としてのマタイ 22 章 37 節等の誓い、遵守すべき事項を掲げています。1877 年（明治 10 年）3 月 5 日で博士が札幌を去る約一カ月前のことです。（余分なことですが 3 月 5 日は私の誕生日と同じです。）

札幌バンドは佐藤昌介の教育界への貢献、内村鑑三の無教会主義および新渡戸稲造の持つ国際性豊かな幅広い影響等が多く創出されています。札幌バンドは先の誓約を核とし、同じ農学校という結束の契機を持ち、更にはクラーク博士の熱烈な伝道を受け継ぎ盛んな平信徒伝道を行ったのです。

以下次号